

大雲經における断肉説

The Ban on Meat-Eating in the *Mahāmeghasūtra*

鈴木 隆 泰
Takayasu SUZUKI

——全体の構成——

1. 大乘經典に表れた〈断肉の系譜〉
2. 〈断肉の系譜〉を巡る二つの問題
 - 2-1. 〈断肉の系譜〉が經典の成立順序を反映している可能性
 - 2-2. 〈断肉の系譜〉に表された諸經典における断肉の諸相
3. 『大雲經』における断肉説
 - 3-1. 漢訳のみに表れる記述
 - 3-2. チベット訳・漢訳共通の記述
4. 『大雲經』の断肉説より見た經典の成立順序
5. 結論

〈略号及び使用テキスト〉
(参考文献)

1. 大乘經典に表れた〈断肉の系譜〉

すでにいくつかの先行研究が指摘しているように¹、一部の大乘經典には肉食を禁止する經典の題名が列挙されている。この經名列挙を〈肉食を禁止する大乘經典の系譜〉あるいは短く〈断肉の系譜〉と呼称することにすると、その〈断肉の系譜〉の代表例は『楞伽經 *Lankāvatārasūtra*』におけるものとなるだろう。

〔世尊〕「象腋經・大雲經・涅槃經・央掘魔羅經・楞伽經において、私は肉を遠ざけた。」²

この記述は現行サンスクリット刊本のみならず、西暦443年に訳出された『楞伽阿跋多羅宝經』四卷(求那跋陀羅訳)の段階から確認される³。したがって、遅くとも5世紀前半には、

象腋經 (*Hastikakṣyasūtra*, *HKS*)

大雲經 (*Mahāmeghasūtra*, *MMS*)

涅槃經 (*Mahāparinirvāṇasūtra*, *MPNS*)

央掘魔羅經 (*Āṅgulimāliyasūtra*, *AMS*)

楞伽經 (*Lankāvatārasūtra*, *LAS*)

これらの大乘經典間に、

象腋經 → 大雲經 (→ 涅槃經) →
央掘魔羅經 → 楞伽經

という〈断肉の系譜〉を認めるテキストがインドに存在していたことが知られる⁴。さらに、6世紀初頭に訳出された『文殊師利問經・*Mañjuśrīpariṣcchā*』二卷(僧伽婆羅訳)においても、類似の形式で〈断肉の系譜〉が継承されている。

〔文殊師利菩薩〕「世尊よ、もし肉を食しても構わないのであれば、象腋經・大雲經・央掘魔羅經・楞伽經などの諸經では、なぜ〔肉食を〕禁じているのですか。」⁵

実際に『楞伽經』の名称を挙げていることから、この『文殊師利問經』の〈断肉の系譜〉が『楞伽經』の所説を踏まえたものであることはまず疑いない。このように、5世紀前半までの成立、資料の充実、他經典への影響という三点に鑑みて、本研究は〈断肉の系譜〉を前掲の『楞伽經』のものに絞って扱うこととする。

2. 〈断肉の系譜〉を巡る二つの問題

さて、この〈断肉の系譜〉を巡っては、大きく分けてこれまで二つのことがらが問題とされてきた。

- [1] 〈断肉の系譜〉が經典の成立順序を反映している可能性。
- [2] 〈断肉の系譜〉に表された諸經典における断肉の諸相の解明。

2-1. 〈断肉の系譜〉が經典の成立順序を反映している可能性

『宝性論 *Ratnagotravibhāga-mahāyānottara-tantrasāstra*』に至る如来蔵思想形成史の解明を試みた高崎 [1974] が、〈断肉の系譜〉に表された順序に従って諸經典が成立した可能性について言及している。

本経〔大雲経〕が、『涅槃経』よりも先行するとすると、これまで『涅槃経』に帰していた「如来の密語」としての如来常住説が、この経の創始という重大なことになる。それを言うために、上述のような部分的証拠だけでは、あるいは不十分かも知れないが、少くとも如来蔵説の教理的展開に関する限りは、と限定した上で、ここでは『大雲経』の先行説を主張しておこう。なお、これもまた甚だ不十分な論拠で、論拠にならないかも知れないが、『楞伽経』の挙げる食肉を禁ずる諸経の名の列挙で、『象掖』→『大雲』→『涅槃』→『央掘魔羅』→『楞伽』とあるのは、そのとおりの順序で伝承されたことを示しているのかも知れない。

(高崎 [1974] 295。〔〕内筆者)

上記引用からも分かるように、高崎 [1974] は思想的側面からの考察に基づいて『大雲経』先行説を唱え、それを補強するかたちで『楞伽経』の〈断肉の系譜〉に言及しているに過ぎず、『大雲経』の断肉説そのものを考察対象としているわけではない。高崎 [1974] 以降も、この脈絡で〈断肉の系譜〉を扱った本格的研究は寡聞にして未詳であり⁶、いわばこの問題は、高崎 [1974] が提起していたにも関わらず、その後四半世紀以上に渡って放置され続けてきたと言っても過言ではないのである。

2-2. 〈断肉の系譜〉に表された諸經典における断肉の諸相

〈断肉の系譜〉に表された諸經典を含め、仏教における断肉の問題を概観したものとして、Schmithausen [1999] が挙げられる。以下、その内容に沿って従前研究を概観しておこう。

まず、初期仏教における断肉に関しては、「不殺生」「禁欲主義」「社会的配慮(禁忌・タブー)」の三視点からの複合的分析が可能であるとする。第一の「不殺生」の視点では三種の浄肉の問題を取り上げて、問題となっているのは殺生の責任、業との関わりであり、肉の不浄性は関与していないことを示している。第二の「禁欲主義」の視点では、肉食を贅沢と見て厳禁する立場と、肉食を許す立場との葛藤があり、肉食が贅沢か否かが問題となっている。第三の「社会的配慮(禁忌・タブー)」の視点では、仏教教団がヒンドゥー社会の肉食禁忌に配慮して断肉を主張していく次第が示されている。

次に、大乘仏教においては、阿蘭若処や苦行・禁欲・慈悲との関わりで限定付きの断肉が『象腋経』や『大雲経』で主張されるようになり、さらに『涅槃経』(苦行・禁欲・慈悲・ヒンドゥー社会のタブーの受容)、『央掘魔羅経』(如来蔵思想と連関)、『楞伽経』(慈悲・殺生)に至ると肉食は完全に禁止される。

最後に、タントラ仏教においては、マントラによる儀礼的不浄の回避が必要なほどに肉食がタブー視されており、ヒンドゥー社会の影響がさらに色濃く反映されていることが述べられている。

以上 Schmithausen [1999] に沿って、仏教における断肉を巡るこれまでの研究を概観してみた。Schmithausen [1999] は従前研究を網羅した上で簡潔に纏めているだけでなく、自らも現存諸仏典を参照しており、仏教における断肉の諸相を知るために大変有益なものとなっている。しかし『大雲経』に限っては、チベット訳 *MMS_T* は参照されることなく、ただ漢訳 *MMS_C* のみに存在する記述⁷に基づいて論旨が展開されている。したがって、Schmithausen [1999] の有益性自体について異論をはさむものではないが、少なくとも『大雲経』の取り扱いに関しては、

残念ながら不十分な点を残していると言わざるを得ないのである。

このように、2-1, 2-2いずれの場合においても、『大雲經』における断肉説の考察が十分ではなかったと言ってよいだろう。そこで本研究では『大雲經』に焦点を当て、〈断肉の系譜〉を巡る二つの問題の再検討を試みることにする。

3. 『大雲經』における断肉説

『大雲經』における断肉説は、

(1) 漢訳のみに表れる記述

(2) チベット訳・漢訳共通の記述

の二種に大別される。以下、それぞれの記述をテキストに従って検証する⁸。

3-1. 漢訳のみに表れる記述

まず、【MMS 38.1.1】(『大雲經』第三十八章第一節第一項、MMS_r203a1-204b6, MMS_c1099a21-c28) に表れる二つの記述 (a) (b) を、MMS_cに基づき見ておこう。

(a) [世尊]「天子たちよ、未来世において正しい教えが滅しようとしているときには、[比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷という仏教徒の] 四衆でありながら、福德が少なく智慧劣り、飽くことなく欲望を起こし、善根を失い、法という財産に乏しく、仏法僧の三宝に親近する心を持たず、ただ衣服や食物を得るためだけに頭を剃り糞掃衣を纏う者があるだろう。その心は劣悪であり、禿頭の俗人と変わるところがない。[彼らは禁じられているのに] 使用人を所有し、金銀をはじめとする珍宝やお金や珂貝・琉璃・頗梨を蓄財し、たくさんの穀物・米を備蓄し、牛や馬などの家畜を養い、田や家屋を所有し、様々な身の回りの品を揃え、おいしいからと言って肉を食すであろう。」⁹

(b) [世尊]「天子たちよ、そのような悪世・悪比丘の蔓延る時に、一人の仏弟子

が現れるだろう。彼は戒を護持し清浄であり少欲知足であること、あたかもマハーカーシャパのようである。このジャンプ一州において教化することに巧みであり、私の弟子でありながら悪い習慣を身につけてしまった者たちに、自らの命すら惜しまずに真実の教えを説くのである。如来の秘密の教えを説き明かし、持戒者・頭陀者を讃歎し、波羅提木叉を護り、糞掃衣に満足し、広く悪人のために次のように説くであろう。

“諸々の大徳よ、世尊は一切の不浄物の受畜も、肉食に貪著することもお許しにならなかった。常に如来は浄戒を護持する者を讃歎し、禁を破る者をお叱りになるのだ。大徳たちよ、もし今私の言うことを聞き入れないのなら、私の持っている力であなた方を懲らしめてやろう。”¹⁰

ここに表明されている断肉は、(a)不正蓄財の禁止と関連させて贅沢食を禁じる断肉、(b)不正蓄財の禁止・持戒・頭陀行と関連する修行者向けの断肉と、いずれの場合も条件付きの限定的断肉であり、決して一般向け、万人向きのものではないことが分かる。このことからMMS_cの断肉説は、ヒンドゥー社会のタブーに配慮する『涅槃經』(第二類)や、如来蔵思想と関連させる『央掘魔羅經』の全面的断肉と比べるとき、より素朴な内容であるという従前研究の指摘(2-2参照)は認められてよい。また、この3-1の記述に従う限り、2-1に示される「經典の成立順序」も否定されないことになる。

3-2. チベット訳・漢訳共通の記述

次に、これまで参照されることのなかったチベット訳・漢訳に共通の記述を見てみよう。『大雲經』の第一章第二節(【MMS 1.2】MMS_r133b1-138a7, MMS_c1081a1-1082a10)において、菩薩がそなえるべき187の徳目が列挙される。これを〈徳目列挙〉と呼称する¹¹。〈徳目列挙〉の中には菩薩の一般的な徳目も入っている一方で、『大雲經』に特有のもの、すなわち、

・三味の重視¹²。

- ・密意を解く(解深密)という意識¹³。
- ・如来と衆生の重ね合わせ¹⁴。
- ・如来常住法身の強調¹⁵。
- ・空性説の再解釈¹⁶。
- ・菩薩の世間随順¹⁷。
- ・仏伝の否定、再解釈¹⁸。

なども見られる。チベット訳・漢訳に共通する断肉説は、この〈徳目列举〉の中に表れる。

[徳目115]食物に貪著しない。

[徳目116]肉食を遠ざける(断肉する)¹⁹。

チベット訳 *MMS_T*が断肉に言及するのは、合計三回に渡って繰り返される、この〈徳目列举〉の箇所のみである。〈断肉の系譜〉の一翼を成す経典として『楞伽経』等にも言及されている『大雲経』としては、拍子抜けするほどに簡略な記述であるという印象を受ける。そのため、〈断肉の系譜〉に言及された『大雲経』は *MMS_C* と同系列のテキストであって、チベット訳 *MMS_T* の系統は〈断肉の系譜〉とは直接関係していないのではないかと考えるかも知れない。

たしかに、*MMS_C* と *MMS_T* の相違が「漢訳者の増広・加筆」ではなく「原典レベルでの系統や発展段階の相違」に基づく可能性が高いことは、鈴木 [1999] で明らかにした通りである。しかし、漢訳 *MMS_C* 系統のテキストのインドにおける消息が現在に至るまで不明である以上、単に *MMS_T* の記述が簡略すぎるという理由だけで、〈断肉の系譜〉に言及された『大雲経』が *MMS_C* 系統(あるいは、どちらとも違う)と想定するのは、余りに便宜的過ぎよう。さらに、断肉に関する記述が簡略なのは別段『大雲経』に限らない。実際、『象腋経』における断肉説も、菩薩の修習すべき陀羅尼の呪句が説かれた後に、

[世尊]「文殊師利よ、もし菩薩があつてこの呪句を学び唱えたいと思うなら、淨行をなし断肉しなくてはならない。」²⁰

と、短く言及されているに過ぎないのである。むしろ注目すべきは、このように簡略な記述に

も関わらず『象腋経』と『大雲経』が〈断肉の系譜〉の中で言及されている、という事実の方であろう。詳しい考察は別稿に譲らざるを得ないが、『楞伽経』編纂者にとっては自らの主張する断肉説を補強するため、それがどんなに簡略な記述であれ、『象腋経』と『大雲経』の名前を出す必要があつたことは確かなのである。

ともあれ以上の点からも、〈断肉の系譜〉に表れた『大雲経』は *MMS_T* と同系統であると考えて不都合はないと言える。

4. 『大雲経』の断肉説より見た経典の成立順序

本稿筆者はこれまでの研究(鈴木 [1999, 2000 a, 2000b, 2001], Suzuki [2001])を通じて、主に如来常住思想と如来藏仏性思想の交渉・変遷過程の考察に基づき、『大雲経』の位置を『涅槃経』第一類と『涅槃経』第二類との間に、すなわち論理的な成立順序として、

『涅槃経』第一類 → 『大雲経』 →
『涅槃経』第二類

という順序が想定されることを示してきた。本章4ではこの想定された成立順序を、断肉説も視野に入れた上で再評価してみる。

本稿3-2で見たように、『大雲経』が断肉に言及するのは【*MMS* 1.2; 2.2.1; 2.2.3】で三度に渡って繰り返される、187の項目に及ぶ徳目列举においてであった。この徳目は、甚深大海水潮三昧をはじめとする三昧を修する菩薩の徳目であることから、『大雲経』が肉食を全面的に禁止しているのではなく、菩薩の修行と関係する、あくまで限定付きの断肉であることが分かる²¹。一方、『涅槃経』第二類の冒頭「四法品第八」は全面的な断肉を宣言している²²。その位置は、「四法品第八」を「四法による説法」「世間随順説」「解脱の譬喩」という三つに分けると、最初の「四法による説法」の中においてである。その断肉の宣言には「淨・不淨」という観点が備わっており、カースト制の確立したヒンドゥー社会の価値を認める態度を有しているときれる。このことは同時に、「四法品第八」の

トレーガーが組織されたグループ化へと志向していることをも意味する。その反対に『大雲經』のトレーガーは、あくまで三昧を修する菩薩の個人的紐帯のもとにあったと推定できることになる²³。

これまでの研究では、『大雲經』と『涅槃經』「四法品第八」のトレーガーの共通性に着目し、両者はかつて非常に近い距離にあったが、「仏塔を完全に拒否し続けるか（大雲經）」、もしくは「仏性 buddhadhātu として内的な仏塔を受容するか（涅槃經）」という、仏塔を巡る態度の差異に基づいて袂を分かったと仮定した。その「仏塔の拒否か受容か」という差異に加え、本研究で明らかになった「断肉に対する態度の差異」も考慮することで、両者の訣別・離反の状況は一層鮮明になってくる。壊れゆく仏身である仏塔を否定し、法身常住を主張する『大雲經』のトレーガーたちは、三昧を修する菩薩の個人的紐帯のもとにあり、贅沢食の禁止という修行的観点から限定的な断肉を主張した。それに反して『涅槃經』のトレーガーたちは、かつては『大雲經』と同様の主張をしていたものの、次第に集団化を指向するようになり、その過程でヒンドゥー社会のタブーを考慮して全面的な断肉を主張せざるを得なくなった。これは「ヒンドゥー社会」と『涅槃經』のトレーガーたちという「集団対集団」の関係を前提としてはじめて意味を持つてくることからもあったのである。

5. 結論

従来、思想的側面からの考察を通じて、『涅槃經』と『大雲經』との先後関係はある程度明らかにされてきていたが、本研究でさらに「断肉」という視点を盛り込んだことで、両者の関係は一層明確になったと言える。『涅槃經』のトレーガーは、『涅槃經』第二類の冒頭部「四法品第八」において、「仏塔を受容」するだけでなく「集団化」し「ヒンドゥー社会のタブーを考慮した全面的断肉」を主張する段階で、『大雲經』のトレーガーと離反したのである。

〈略号及び使用テキスト〉

- AMS** *Angulimāliyasūtra* (『央掘魔羅經』).
AMS_T Tibetan version of the **AMS**, Q No. 879.
AMS_C Chinese version of the **AMS**, T. No. 120 (『央掘魔羅經』四卷, 求那跋陀羅訳).
HKS *Hastikakṣyasūtra* (『象腋經』).
HKS_T Tibetan version of the **HKS**, Q No. 873.
HKS_C Chinese version of the **HKS**, T. No. 814 (『象腋經』一卷, 曇摩蜜多訳).
LAS *Lankāvatārasūtra* (『楞伽經』).
LAS_S *Lankāvatārasūtra*, ed. by Bunyiu Nanjio, Kyoto, 1956.
LAS_{C1} First Chinese version of the **LAS**, T. No. 670 (『楞伽阿跋多羅宝經』四卷, 求那跋陀羅訳).
LAS_{C2} Second Chinese version of the **LAS**, T. No. 671 (『入楞伽經』十卷, 菩提留支訳).
LAS_{C3} Third Chinese version of the **LAS**, T. No. 672 (『大乘入楞伽經』七卷, 実叉難陀訳).
MañjP **Mañjuśrīpariṣcchā* (『文殊師利問經』).
MañjP_C Chinese version of the **MañjP**, T. No. 468 (『文殊師利問經』二卷, 僧伽婆羅訳).
MMS *Mahāmeghasūtra* (『大雲經』).
MMS_T Tibetan version of the **MMS**, Q No. 898.
MMS_C Chinese version of the **MMS**, T. No. 387 (『大方等無想經』六卷, 曇無讖訳).
MPNS *Mahāparinirvāṇasūtra* (『涅槃經』).
MPNS_T Tibetan version of the **MPNS**, Q No. 788.
MPNS_{C1} First Chinese version of the **MPNS**, T. No. 376 (『大般泥洹經』六卷, 法顯訳).
MPNS_{C2} Second Chinese version of the

- MPNS**, T. No. 374 (『大般涅槃經』四十卷, 曇無讖訳).
- RGV** *Ratnagotravibhāga-mahāyānottaratantraśāstra* (『宝性論』), ed. by J. Johnston, Patna, 1950.
- Q 『チベット大蔵経 北京版』.
- N 『チベット大蔵経 ナルタン版』.
- S 『チベット大蔵経 トックパレス写本』.
- T 『チベット大蔵経 東京写本』.
- D 『チベット大蔵経 デルゲ版』.
- H 『チベット大蔵経 ラサ版』.
- T. 『大正新脩大蔵経』.
- [1994] 『文殊經典部1』(新国訳大蔵経), 東京:大蔵出版.
- Ruegg, D. S.
- [1973] *La Traité du Tathāgata-garbha du Bu ston rin chen grub*, Paris.
- Schmithausen, L.
- [1999] On the Problem of Meat-Eating and Vegetarianism in Buddhism (Handout for the lecture at the University of Tokyo on 16 Mar. 1999).
- Suzuki, T. [2001] The Recompilation of the *Mahāparinirvāṇa-sūtra* under the Influence of the *Mahāmegha-sūtra*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 98, 34-38.

(参考文献)

- 下田正弘 [1997] 『涅槃經の研究—大乘經典の研究—』, 東京:春秋社.
- 鈴木隆泰 [1998] 『大雲經』の目指したものの, 『インド哲学仏教学研究』5, 31-43.
- [1999] 央掘魔羅經に見る仏典解釈法の適用, 『印度学仏教学研究』95, 133-137.
- [2000a] 涅槃經系經典群における空と実在, 『東洋文化研究所紀要』139, 109-146.
- [2000b] 如来藏系經典の宗教倫理構造, 『日本仏教学会年報』65, 77-91.
- [2001] 異訳対照に基づくインド大乘經典史解読の一例, 『東洋文化研究所紀要』141, 147-166.
- [2003] 『大雲經』の構造, 『仏教文化研究論集』7.
- 高崎直道 [1974] 『如来藏思想の形成—インド大乘仏教思想研究—』, 東京:春秋社.
- 松本史朗 [1991] 『涅槃經』とアートマン, 『〈我〉の思想』, 東京:春秋社, 139-153.
- 村上真完・及川真介

注

- ¹ 高崎 [1974] 219, 295; Ruegg [1973] 16-17 など.
- ² Hastikakṣye Mahāmeghe Nirvāṇāṅgulimālike/Laṅkāvatārasūtre ca mayā māṃsaṃ vivarjitam// (*LAS*_s 258.4-5)
- ³ 縛象与大雲, 央掘利魔羅, 及此楞伽經, 我悉制斷肉。(*LAS*_{c1} 514b6-7)
- ただしこの求那跋陀羅訳 (*LAS*_{c1}) には『涅槃經』が欠落している。異訳を見ると, 513年に訳出された『入楞伽經』十卷(菩提留支訳, *LAS*_{c2}) では,
- 象腋与大雲, 涅槃勝鬘經, 及入楞伽經, 我不聽食肉。(*LAS*_{c2} 564b20-21)
- と, 『央掘魔羅經』の代わりに『勝鬘經』が表れるが, この『勝鬘經』は『指鬘經』(『央掘魔羅經』のこと)の誤記である可能性がすでに指摘されている(高崎 [1974] 233)。一方, 700-704年訳出の『大乘入楞伽經』七卷(実叉難陀訳, *LAS*_{c3}) では,

象脇与大雲，涅槃央掘魔，及此楞伽經，
我皆制断肉。(LAS_{c3} 624c3-4)

となっており、現行サンスクリット刊本 LAS_c の読みと一致する。

⁴ 現時点での「系譜」ということばは、『楞伽經』にその順序で記されている」以上の意味を持っていない。結論の一部を先取りすることとなるが、それが「思想の発展・変遷度合いから見た論理的成立順序」という意味で用いられるようになるのは、本稿の考察を通してである。

⁵ 爾時文殊師利復白仏言。世尊，若得食肉者，象龜經(=象腋經)・大雲經・指鬘經(=央掘魔羅經)・楞伽經等諸經，何故悉断。

(MañjP_c 493a5-7)

⁶ 高崎 [1974] によるこの『大雲經』先行説』に対しては、松本 [1991] 146-149、下田 [1997] 675 がそれぞれ反論を呈しているが、両者ともにその根拠を明示していない。

⁷ 本稿 3-1 参照。

⁸ 使用テキスト、章立て、略号等は鈴木 [2003] に準ずる。特にチベット訳テキストについては、Q, N, S, T, D, H を用いて校訂したものであるため、Q の読みとは必ずしも一致しない。ただしロケーション表示は便宜上 Q をもって行うこととする。

⁹ 復次天子，未来之世法欲滅時，我四部衆薄福少智不知厭足，退失善根貧於財財，無心親近佛法僧宝，為衣食故剃頭染衣。其心麤穢，如秃居士。畜養奴婢金銀珍宝錢財珂貝琉璃頗梨，貯聚穀米牛馬畜生田宅屋舍，雜色臥具食肉嗜味。

(MMS_c 1099b22-28)

この箇所と対応しているチベット訳 MMS_T 203b2-6は、不正蓄財に関する記述で終わっており、肉食については言及していない。

¹⁰ 天子，如是惡世惡比丘時，爾時我当有一弟子，持戒清淨少欲知足如大迦葉，善能教化閻浮提内，我弟子中習行惡者，説真正語不惜身命，広開如来深密秘藏，讚嘆持戒行頭陀者，成就具足波羅提木叉，称美知足糞掃衣服，広為惡人説如是言。“諸大德，世尊不聽受畜一切不淨之物，貪味食肉。如来常讚持淨戒者，呵責毀禁。大德，汝今若不我語者，我有大力勢能相降伏。”

(MMS_c 1099c2-10)

この箇所と対応しているチベット訳 MMS_T 203b7-204a2は、弟子の発言(“”で囲まれた部分)を全く欠いており、肉食に関する記述が存在しない。

¹¹ <徳目列举>はこの【MMS 1.2】に加え、【MMS 2.2.1】(MMS_T154a2-158b2, MMS_c1086a2-27), 【MMS 2.2.3】(MMS_T158b6-171b2, MMS_c1086a29-1088b4) の合計三回に渡って繰り返される。なお、以下で[徳目 n]は、<徳目列举>のうちの n 番目の項目であることを示す。

¹² [徳目1,2] MMS_T133b6, MMS_c1081a5-6。<徳目列举>の最初に表れていることから分かるように、『大雲經』は三昧を大変重要視している。事実、これらの<徳目列举>も、「甚深大海水潮 Zab mo brtan pa'i chu'i rgya mtsho'i dus tshod (甚深にして堅固な大海水の満潮)」という名の三昧をはじめとする諸々の三昧を修する菩薩の徳目である。

¹³ [徳目13] MMS_T134a1-2, MMS_c1081a6-7。MMS_cに関して、刊本は「諸仏実語」とするが、MMS_T、宋・元・明の三本、宮本に従い「諸仏密語」と訂正した。

¹⁴ [徳目25] MMS_T134a5-6, MMS_c1081a17-18。

¹⁵ [徳目31-43] MMS_T134a7-b7, MMS_c1081a18-b1; [徳目54] MMS_T135a3-4, MMS_c1081b6-7; [徳目95-100] MMS_T136a2-6, MMS_c1081b24-27。これらは『大雲經』の主題を形成する徳目である。

¹⁶ [徳目145-148] MMS_T136b8-137a1, MMS_c1081c8-9。

¹⁷ [徳目166-168] MMS_T137a8-b3, MMS_c1081c18-19。

¹⁸ [徳目180-187] MMS_T137b8-138a7, MMS_c1082a3-9。

¹⁹ kha zas la brkam par yañ mi 'gyur ba dan/ sa'i kha zas kyañ rnam par spon bar (*vivar-jita) yañ 'gyur ba dan/(MMS_T 136b1-2).

不貪飲食，常修知足終不食肉。

(MMS_c 1081c2-3)

²⁰ bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa/ 'Jam dpal rig snags (*vidyā) 'di dag 'don pa'i byañ

chub sems dpas gtsaṅ spra bya ba dañ/ śa mi
bza' bar kun tu spyad par bya'o//

(*HKS*₇115a2-3)

仏言。文殊師利，若有菩薩欲通達此陀羅尼章句，当好淨行不食於肉。(HKS_c787a9-11)

²¹ この点については，3-1，3-2 どちらも共通している。

²² 下田 [1997] 408-412, 418-419 参照。

²³ 『大雲經』が三昧を重視していることは本稿註12にも示したとおりである。さらに、『大雲經』はヒンドゥー社会の「浄・不浄」の観念に配慮しておらず，集団化・教団化への指向性も示していない。

(アジア文化／宗教文化)